

和歌山県有田郡吉備町

野田・藤並地区遺跡発掘調査概報

1981. 3

和歌山県教育委員会

社団法人 和歌山県文化財研究会

序 文

有田郡吉備町に所在する、野田地区・藤並地区遺跡は、古代有田郡(在田郡)の中心地として、早くから人々の営みが盛んであった地域にあり、原始から中世にかけての貴重な埋蔵文化財の包蔵が予見されてきたところです。

昭和49年度に日本道路公団から、海南湯浅道路建設に先立って事前協議があり建設予定地周辺の分布調査並びに試掘調査を実施してきました。こうした経過の中で、昭和55年度事業として、道路建設予定地の事前発掘調査を日本道路公団から委託され実施したものです。

発掘調査の成果は予期した以上の貴重な遺構・遺物を検出し、吉備町の埋ずもれた歴史の解明に大きな手がかりとなったことと存じます。ここに発掘調査の概要を刊行し、皆様方の調査・研究資料の一端ともなれば幸いです。

最後に、本調査の遂行にご協力いただきました関係者の皆様方に厚くお礼申し上げますとともに、今後の埋蔵文化財保護行政にご支援賜われますようお願いいたします。

昭和56年 3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高橋 正司

例 言

1. 本書は、和歌山県が日本道路公団より委託を受けて実施した昭和55年度野田・藤並地区遺跡発掘調査の概要報告である。
2. 本発掘調査に要した経費は日本道路公団が負担した。
3. 発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに社団法人和歌山県文化財研究会が実施した。
4. 発掘調査は、和歌山県文化財保護審議会委員の指導を受け、県文化財課技師藤井保夫・県文化財研究会技術員渋谷高秀を担当者として実施した。
5. 調査にあたって、日本道路公団大阪建設局海南・湯浅道路工事事務所、福川建設、大鉄工業株式会社、吉備町教育委員会、地元野田地区の方々より種々配慮を受けた。
6. 本概報の編集は渋谷が担当した。本概報の執筆は、Ⅰ・Ⅲ-4-5区、Ⅳ-藤並地区遺跡を藤井、Ⅲ-3-6区を富加見泰彦文化財研究会技術員、Ⅲ-4-3区を上田秀夫県文化財課技師が、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを渋谷が担当した。
7. 現場作業、遺物整理作業にあたって、佐々木美知、山田展生、沢崎敏起らの援助を受けた。

目 次

Ⅰ 発掘調査に至る経緯	1
Ⅱ 位置と環境	1
Ⅲ 調 査	
1 調査概要	3
2 遺構の概要	3
3 野田地区遺跡	5
4 藤並地区遺跡	16
Ⅳ 結 語	18



野田・藤並地区遺跡位置図

調査組織

調査委員

舘 磨 正 信 (和歌山県文化財保護審議会委員)
巽 三 郎 ()
都 出 比呂志 ()
藤 沢 一 夫 ()
辻 岡 治 男 (吉備町文化財保護審議会委員長)
岩 上 豊 顕 (吉備町教育委員会教育長)
井 上 至 (和歌山県文化財課課長)

調査員

藤 井 保 夫 (和歌山県文化財課技師)
上 田 秀 夫 ()
渋谷 高 秀 (和歌山県文化財研究会技術員)
武 内 雅 人 ()
富加見 泰 彦 ()
土 井 孝 之 ()

事務局

局 長 海 野 正 幸 (和歌山県文化財研究会事務局長)
幹 事 桃 野 真 晃 (和歌山県文化財課第2係長)
主 事 宮 本 登志夫 (和歌山県文化財課第2係主事)

I. 発掘調査に至る経緯

和歌山県教育委員会は、昭和44年から同46年にかけて、日本道路公団の委託を受け、和歌山市・海南市東郊の府中・鳴神・大日山・大野中遺跡ほかの発掘調査を近畿自動車道和歌山線の建設に先立ち実施してきたところであった。

(註1)

こうしたなかで昭和49年度、近畿自動車道紀南延伸構想にともない、海南市藤白より有田郡吉備町水尻に至る海南湯浅道路の建設計画が具体化された。日本道路公団大阪建設局より、計画路線内における埋蔵文化財等の有無について照会があり、同年8月に海南吉備町間における文化財所在地分布調査を実施した。海南市域より吉備町大谷に至る間はトンネル工法を用いるため問題点は少なかったが、吉備町小島から同水尻にかけては平野部を南北に貫通するため、特に入念な分布調査が必要であった。しかしながら、その多くは柑橘類の果樹園であり、耕土の客土により旧地表面が覆われているため、埋蔵文化財の表面散布を観察するには不可能に近い状況であった。分布調査を実施する一方、地元有識者より情報蒐集を行った結果、古代有田郡（安諦郡→在田郡）の中心地域の一部でもあり、貴重な埋蔵文化財の蔵地が予測された。このため、和歌山県指定文化財「野田法篋印塔（1346年銘）」が所在する吉備町野田地区において、水田、果樹園を対象に昭和50年2月～3月にかけて試掘調査を実施したところ、中世遺物のほかに杭列等が検出され本格的な調査が必要であることが判明した。

こうした状況から、和歌山県教育委員会は、吉備町野田地区から水尻地区にかけては、全域800メートルにわたって試掘調査を実施のうえ、第二次調査に対処する旨協議し、昭和55年度事業として着手した。

(藤井)

註1 和歌山県教育委員会「近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告書」昭和47年

II. 位置と環境

野田・藤並地区遺跡は、和歌山県有田郡の西方、有田川下流域南岸に所在する。野田地区遺跡は沖積平野と河岸段丘上に、藤並地区遺跡は、沖積平野に位置する。

(註1)

両遺跡の所在する有田川下流域（行政上は吉備町）は、地形により、三つの地域に区分しえる。即ち、有田川北部にそびえる長峰山系一千葉山、高坪山、鷲ヶ峰等々を中心とする山岳地帯、有田川南岸中央部に発達した沖積平野と第四紀洪積世の時代につくられた河岸段丘、そして三本松峰を中央にした低位の山岳地帯である。

(註1)

北部と南部の山岳地帯にはさまれ、有田川の浸食、堆積作用によって形成発達した中央部の沖積平野と河岸段丘が、先史より古代にかけての人間活動の主要な舞台である。

河岸段丘は、有田川の南側に五段、北側に二段分布する。第一段丘面は、標高60mに位置し、金屋町吉原付近に、第二段丘面は、標高50～55mで、徳田付近に、第三段丘面は標高30～40mで御霊

(註2)

小学校から東丹生図、高瀬にかけて、第四段丘面は、標高25～30mで、下徳田、垣倉から下津野、天満にかけて分布する。第五段丘は標高13～20mで野田付近に分布する。

(註2)

野田、藤並地区遺跡周辺には、先土器時代から中世にかけて、数多くの遺跡が存在する。

先土器時代の遺跡は、ナイフ形石器、有舌尖頭器などが出土した土生池遺跡がある。

弥生時代の遺跡としては、中央部の沖積平野に前期からはじまるとされる有田川水系の拠点集落尾中遺跡や旧吉備中学校校庭遺跡、また有田川北部に夏瀬の森遺跡がある。

古墳時代は、沖積平野部より段丘面へと生活の中核を移動さす。第四段丘面に天満Ⅰ、Ⅱ遺跡、藤並遺跡、羽釜古窯跡、土生池Ⅰ、Ⅱ遺跡が、第三段丘面に、石ヶ谷遺跡が存在する。古墳は、北岸には大谷1、2号墳、植野古墳、井口古墳また南岸の第四段丘に位置する天満1、2、3号墳が知られる。

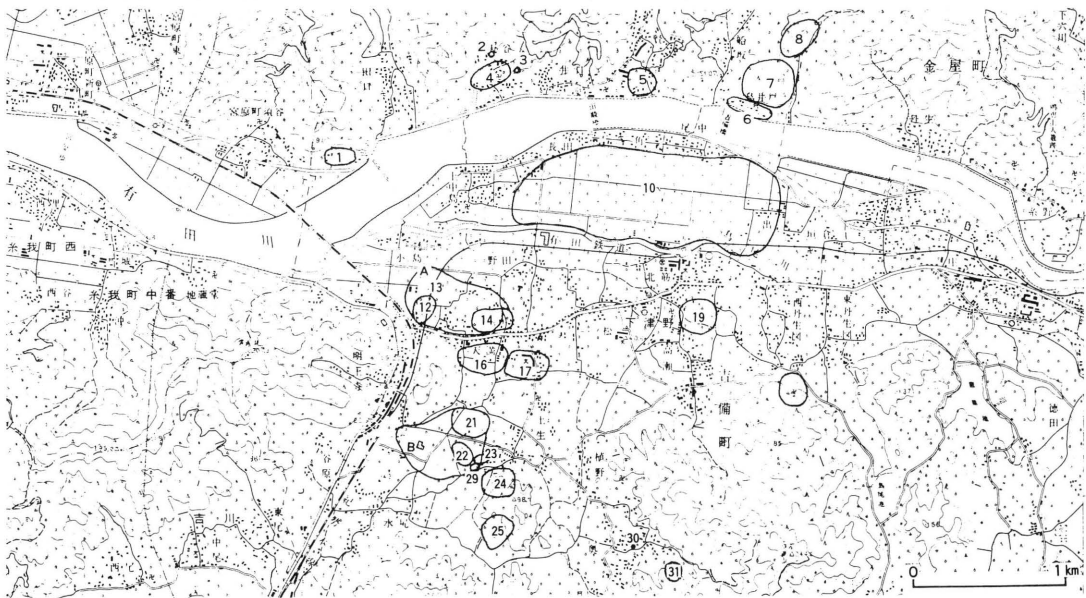
古墳時代後期以降奈良時代にかけての古窯址群としては、良質の粘土と山岳地帯に豊富に存在する材木を背景に営まれた城山、芝之段、風呂の谷、前山古窯址群が知られる。

奈良時代から平安時代にかけて創建された寺院址に推定されるものには、田殿廢寺跡、最勝寺跡、築那院跡、観音寺跡、長楽寺跡などがある。

(渋谷)

註1 地質、遺跡については吉備町誌上下巻、吉松敏隆氏、田中重雄氏の執筆項目に依った。

註2 吉備町誌「地質」では、有田川南岸の段丘は4段とされ、第四段丘の「下流部では明瞭な段差が認められず、沖積層に没している」とされているが、野田地区遺跡の発掘調査により第五段丘の検出、また第五段丘と沖積層の境界が明瞭に検出された。この段丘は、第四段丘面よりも5～12m程低く、第五の段丘と考えられる。ただこの第五の段丘の拡がりは今のところ明瞭ではない。



第1図 野田・藤並地区遺跡周辺遺跡

A 野田地区遺跡 B 藤並地区遺跡 1 田殿廢寺跡 2 大谷古墳 3 大谷2号墳 4 築那院跡 5 賢遺跡 6 夏瀬の森遺跡 7 夏瀬森祭祀遺跡 8 最勝寺跡 9 明恵上人紀州遺跡 10 田殿尾中遺跡 11 旧吉備中学校校庭遺跡 12 野田の宝篋印塔 13 観音寺跡 14 藤並遺跡 15 天満古墳群 15-1 天満1号墳 15-2 天満2号墳 13-3 天満3号墳 16 天満Ⅰ遺跡 17 天満Ⅱ遺跡 18 宗祇法師屋敷跡 19 土居の内館跡 20 石ヶ谷遺跡 21 羽釜古窯跡 22-1 城山1号窯跡 22-2 城山2号窯跡 22-3 城山3号窯跡 23-1 地藏山1号窯跡 23-2 地藏山2号窯跡 24-1 風呂の谷1号窯跡 24-2 風呂の谷2号窯跡 25-1 土生池Ⅰ遺跡 25-2 土生池Ⅱ遺跡 26 長楽寺跡 27 八幡神社板碑 28 八幡神社宝篋印塔 29 地藏山遺跡 30 奥宝篋印塔 31 奥遺跡 32 古墳遺跡

Ⅲ. 調 査

1. 調 査 概 要

野田・藤並・神楽山地区遺跡は、遺跡としての性格・全容が不明なため、第1に全容把握に重点をおき試掘調査を実施した。野田地区遺跡は、昭和56年5月より、全長370m、幅10～20mの調査地区全域を対象に、3×3mの試掘坑、3×40～50mの試掘トレンチを設定、遺構、遺物の検出された、4～7区に限って全面発掘調査をおこなった。神楽山地区遺跡は、昭和56年8月分布調査を行なった結果、遺構・遺物の存在を明瞭に確認する所見が得られなかったため立合調査を実施することとどめた。藤並地区遺跡は、昭和56年7月より、3×3mの試掘坑を対象とする5,000㎡の調査地区全域に13ヶ所設定、試掘調査を実施し、過去瓦粘土採掘のため攪乱を受けていた2区を除く全域に対し発掘調査を行なった。(渋谷)

2. 遺 構 の 概 要

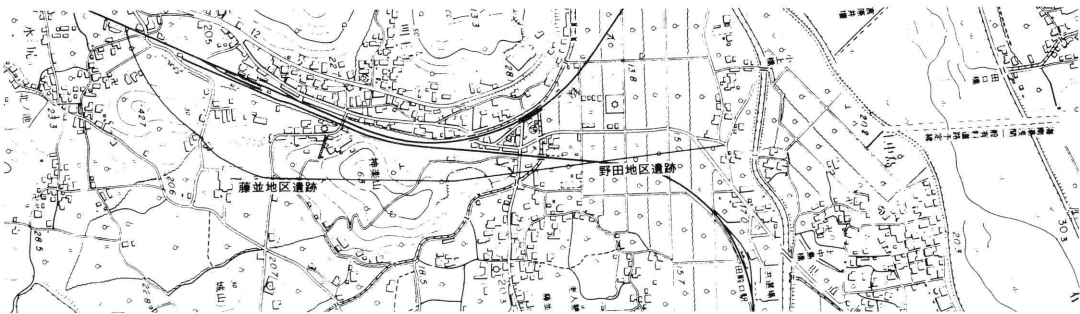
(野田地区遺跡)

第五段丘上から検出した遺構は全て中世のものである。検出遺構は、掘立柱建物跡、多量の中世遺物が一括出土した区画用の溝跡また農業用水路などがある。

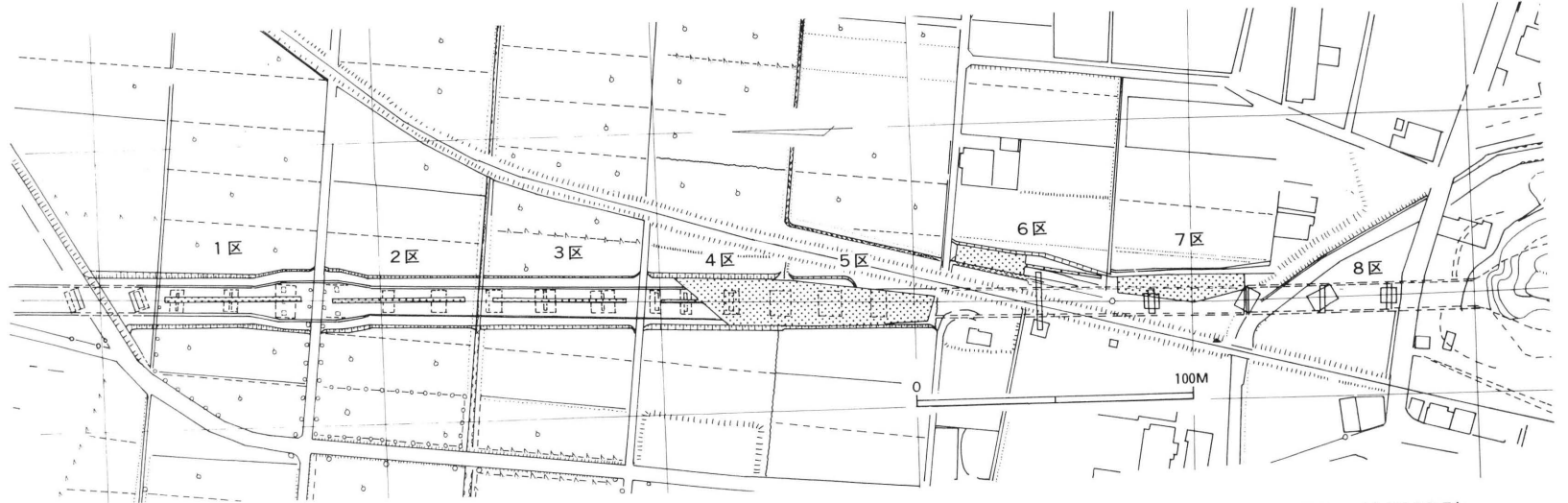
沖積平野と第五段丘の境界からは、弥生時代後期～室町時代に至る農業用水路と推定される溝を調査区内25mにわたって十条検出した。溝群は時代によって、層位、規模、流路を変えているが、平野と段丘の境界部に掘削される点に関しては、各時代共通である。溝群は有田川の氾濫や段丘よりの落込み等の条件に規定されつつ、改修、廃絶、新掘削を弥生時代後期から室町時代に至るまで繰り返したものと考えられる。各溝内の堆積土中より各時期の土器類、木器類が一括出土した。

(藤並地区遺跡)

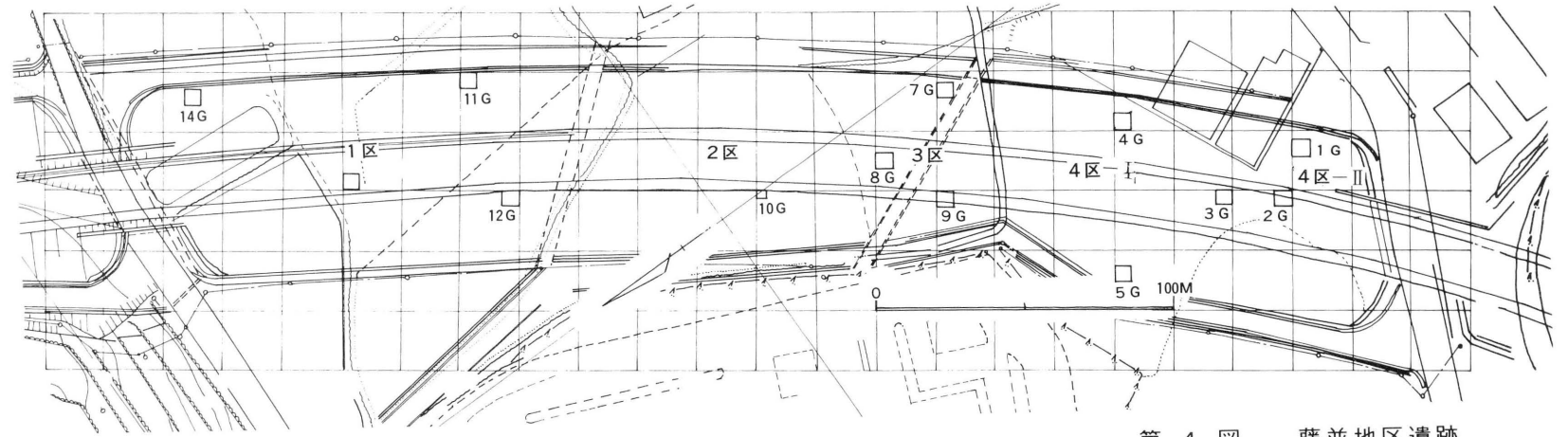
奈良・平安時代にかけての土坑、ピット群、溝跡などを検出した。また中世以降大規模に地形を削平している点も明確になった。(渋谷)



第 2 図 野田・藤並地区遺跡位置図



第 3 図 野田地区遺跡



第 4 図 藤並地区遺跡

3. 野田地区遺跡

1～4区は沖積平野部に、5～7区は第五段丘上に位置する。

4 区

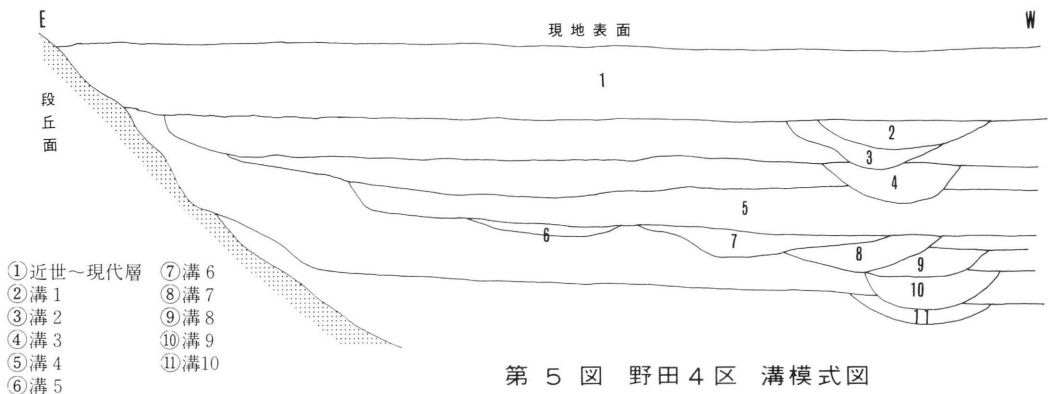
発掘対象とした遺構は、第五段丘と沖積平野の境界部に掘削された溝群である。層位、流路を変え、流れを有していた十条の溝群は、弥生時代後期から室町時代までの長期間にわたる。この間、弥生時代中期を上限とする段丘面より、沖積平野への土砂の落込み（第6図27～30）、また有田川の数次にわたる大規模な氾濫により、約3mの堆積層が確認しえた。各溝の時期（つくられた時期、使用された時期、廃絶された時期）については、対象とする遺構が流れを有し、層位、流路をかえた十条の溝群で、各個の溝が切り合い関係をもつという点、また個別の溝自体も改修や溝ざらえ等の人為的作業をおこなっている点からして単純に決定しえない性格をもつが、大きくは、溝10が弥生時代後期後半、溝9、8が古墳時代前期（庄内～布留式期）、溝7が奈良時代後半、溝6、5が平安時代前期～中期に、溝4が平安時代後半に、溝3、溝2、溝1、が鎌倉時代～室町時代にそれぞれ比定しえるものとする。

溝 1

標高12.6m、灰色粘土上面で検出。溝の規模は、幅2.6m、深さ0.6mを測る。検出された両側の肩部には、径0.6m、長さ0.5～0.8mの丸杭を打つ。溝内堆積層は二層である。下層は、茶灰色土と灰色粘土、上層は茶灰色土と砂層の互層である。堆積土中には、先端を鋭く切り込み、節を抜いていない径1cm前後の短い竹が不規則、垂直に打ち込まれているのが確認された。多くは、溝内堆積土中に先端部をもつことから溝廃絶後に打ち込まれたものである。出土遺物は、少量の瓦器碗、土師器片、陶磁器などがある。

溝 2

標高12.6m、灰色粘土上面で検出。幅3.1～3.5m、深さ0.7～1mを測る。両側の肩部には、径8cm前後、長さ1m前後の丸杭を密に打ち込む。また溝の東側肩部中央は木杭をしがらみ状に打ち込み、更に茶灰色土にバラスを混入した肩部をつくり護岸している。これは溝3を切ってつくられた溝2の東側肩部が、溝3の堆積土中にあり、軟弱なため、西側肩部より強く護岸を必要としたた



第5図 野田4区 溝模式図

めにとられた土木技術と考えられる。溝内堆積土は大きく二層に分かれる。下層は、灰色土と砂層の互層、上層は砂層と砂礫層の互層である。出土遺物は、瓦器（第6図1～4）陶磁器類があり、木器類としては上層の砂礫層上面より一ヶ所に800点余が一括出土した笹塔婆（第7図3～7）や塔婆、曲物、うるし塗皿5点、箸、筴、下駄などがある。

溝 3

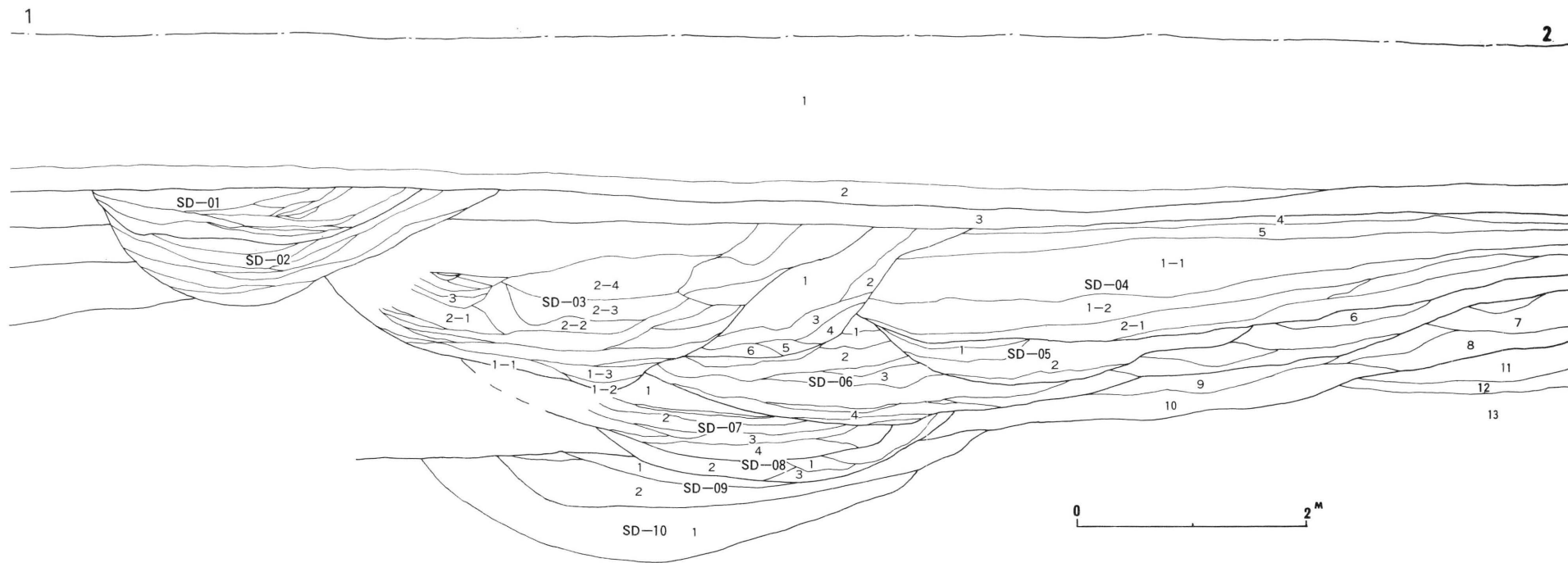
標高12.2mで検出された淡青灰色粘土上面より切り込む。幅4.3～5.3m、深さ1mの素掘りの溝である。検出した溝の中央部を占めるB地区の肩部には、角材の杭がまばらに打ち込まれる。溝1と同様、東側肩部は護岸のために黒褐色土で肩部を形成する。溝内堆積土は大きく三区分手え、これが改修、再掘削の状況を示すものとする。最も古い時期の堆積土は二層に分層しえる。砂礫層と淡茶灰色土である。次の時期の堆積土は砂層の互層である。この砂層を切って灰色土系統の粘土層の堆積層がある。規模は3.2m前後。最も新しい時期の堆積土は、二期目の堆積層である灰色土系統の粘土層を切ってつぐられ、黄灰色砂が堆積する。規模は1m前後である。出土遺物は、瓦器（第6図5～7）、陶磁器類などがある。木器類は、篋（第7図18）、曲物、箸、下駄、方形曲物、刀子状木製品、板材などがある。

溝 4

幅9m以上、深さ約1mである。標高約11.7mで検出した淡青灰色粘土層上面より切り込む。C—D間セクションの観察では淡青灰色粘土上面よりの切り込みは鋭く、また溝10から溝5まで連続した遺構の延長線上に位置する点からして人工的に掘削された可能性をもつ。溝内堆積土は、基本的に4区分しえる。最も古い時期の堆積層第4層は、3層に細分でき、砂層を主体に堆積する。最下層には10～20cm大の河原石が多い。明確に流れの堆積を示す。次の時期の堆積層第3層は、4層に細分しえる。青灰色砂の堆積が3層つづき、その下に砂礫層が存在する。青灰色砂の堆積状況は、下端面の凹凸が激しく木片を含み、急な流れの堆積状況を呈する。最も下位に位置する砂礫層は、0.3～3cm大の礫を主体にした層である。次の区分の堆積層第2層は、3層に分層しえる。灰色粘性土を主体にし、木片もわずかに含む。最下層は砂礫層のブロックをつくる。急激な流れではないが、よどみつつも流れ堆積の状況を観取しえる。最も上位に区分される堆積層第1層は、黒褐色系統の土で2層に細分しえ、段丘に含まれるバラス層の混入が多くみられる層で、流れの状況は、みられない。出土遺物は、古いタイプの瓦器椀（第6図8、9）、土師器類（第6図11）などが第2層中より出土し、第3、4層からは、Aタイプの黒色土器椀（第6図10）、土師器皿、杯などが出土した。木器類には、曲物、下駄、木槽、割載材、大足の枠など出土する。

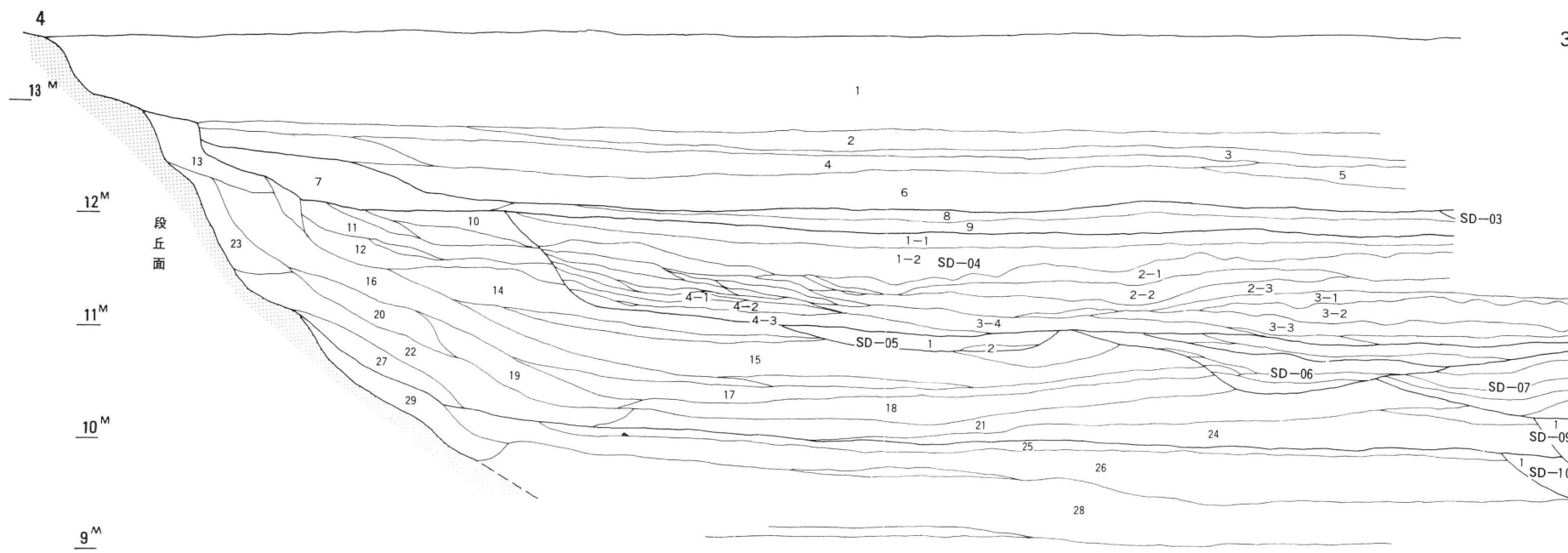
溝 5

切り込み面を溝4で削平され、下部のみ残存する。C地区においては明瞭に検出したが、AB地区では不明瞭である。C—D間セクションにおいては溝5と平行して検出されたが、B—C間セクションで溝5を切ることを確認した。規模は推定で幅2.4m以上、深さ0.4m以上の素掘りの溝



第 8 図 野田地区遺跡 4区 A-B間セクション土層図

- 8 図層名**
- 1 近～現代層
 - 2 黄灰色土
 - 3 灰色粘土
 - 4 淡青灰色粘土
 - 5 暗灰色土
 - 6 礫層
 - 7 青灰色砂質土
 - 8 灰色粘性土
 - 9 砂礫層
 - 10 灰色粘性土
 - 11 灰色粘性土
 - 12 灰色带状粘土
 - 13 灰色粘性土 I
- SD-05**
- 1 砂層
 - 2 茶灰色シルト
- SD-06**
- 1 砂層
 - 2 灰色粘土
 - 3 茶灰色砂
 - 4 砂礫層
- SD-07**
- 1 青灰色砂
 - 2 灰色砂
 - 3 灰色粘土 I
 - 4 砂礫層と砂層
- SD-03**
- 1～6 黒褐色土
 - 1-1 茶灰色砂泥土 I
 - 1-2 淡茶灰色土
 - 1-3 砂礫層
 - 2-1 砂層
 - 2-2 暗灰色土 I
 - 2-3 〃 II
 - 2-4 〃 III
 - 3 黄灰色砂
- SD-08**
- 1 砂礫層
 - 2 砂泥層
 - 3 青灰色砂
- SD-09**
- 1 粘土層
 - 2 茶灰色土
- SD-04**
- 1-1 黒褐色粘土 I
 - 1-2 〃 II
 - 2-1 灰色砂層
- SD-10**
- 1 茶灰色土



第 9 図 野田地区遺跡 4区 B-C間セクション土層図

- 9 図層名**
- 1 近～現代層
 - 2 茶灰色土
 - 3 黄灰色土
 - 4 青灰色土
 - 5 黄灰色土
 - 6 灰色粘土
 - 7 黒灰色粘土(ガラス含む)
 - 8 青灰色粘土
 - 9 暗灰色土
- SD-10**
- 1 茶灰色土
- SD-04**
- 1-1 黒褐色土 I (ガラス含む)
 - 1-2 〃 II (〃)
 - 2-1 灰色砂質土 I
 - 2-2 〃 II
 - 2-3 〃 III
 - 3-1 青灰色砂 I
 - 3-2 〃 II
 - 3-3 〃 III
 - 3-4 黄灰色砂
 - 4-1 砂層 I
 - 4-2 砂層 II
 - 4-3 灰色砂
- SD-05**
- 1 砂層
 - 2 茶灰色シルト
- SD-09**
- 1 灰色砂質土
- 10 淡青灰色粘土
 - 11 青灰色粘土
 - 12 灰色砂質土
 - 13 ガラス層
 - 14 灰色粘土 I
 - 15 灰色粘土
 - 16 黒褐色粘土 I
 - 17 淡青灰色粘土
 - 18 灰色粘性土 I
 - 19 淡黒褐色粘性土
 - 20 黒褐色粘土 II
 - 21 灰色粘性土 II
 - 22 黒褐色粘土 IV
 - 23 〃 III
 - 24 灰色粘性土 III
 - 25 灰色带状粘土
 - 26 淡灰色粘性土
 - 27 黒褐色粘土 V
 - 28 茶灰色粘性土
 - 29 黒褐色粘土 VI

である。堆積土は2層に分層できる。下層は茶灰色シルト、上層は砂層である。出土遺物は、Aタイプ黒色土器碗、土師器杯、皿など、木器類は、人形（第7図11）、曲物、有頭棒、下駄など出土した。

溝 6

上部を溝4に削平され、現存規模2.5m、深さ0.3mで素掘りである。溝内堆積土は、4層に分層しえる。最も下位の第4層は、更に3層に細分しえ、砂礫層を主体とする。第3層は、茶灰色系統の砂礫が3層堆積する。第2層は、木片を多量に含んだ灰色粘土層である。第1層は、砂層である。土器類は、土師器杯、皿類、須恵器壺が、木器類には人形（第7図1、2、10）、105cmと85cmの長さの大型のもの、16cmの長さの小型のもの、木筒（第7図12）、木槽、手鏡形木製品（第7図14）など出土した。

溝 7

標高11m前後で検出。上部を溝4、5、6によって削平される。規模は幅3m前後、深さ0.5mである。東側肩部の崩壊が激しい。確認しえた堆積層は4層に分層しえる。最下層は、流れ堆積を示す砂礫層で他は粘土層よりなる。出土した遺物は、土師器杯（第6図12、13）、皿、須恵器杯、壺など木器類は、木筒1点（第7図13）、人形2点（第7図8、9）、荷札（第7図16）、木槽、箸、下駄、木槌などである。

溝 8

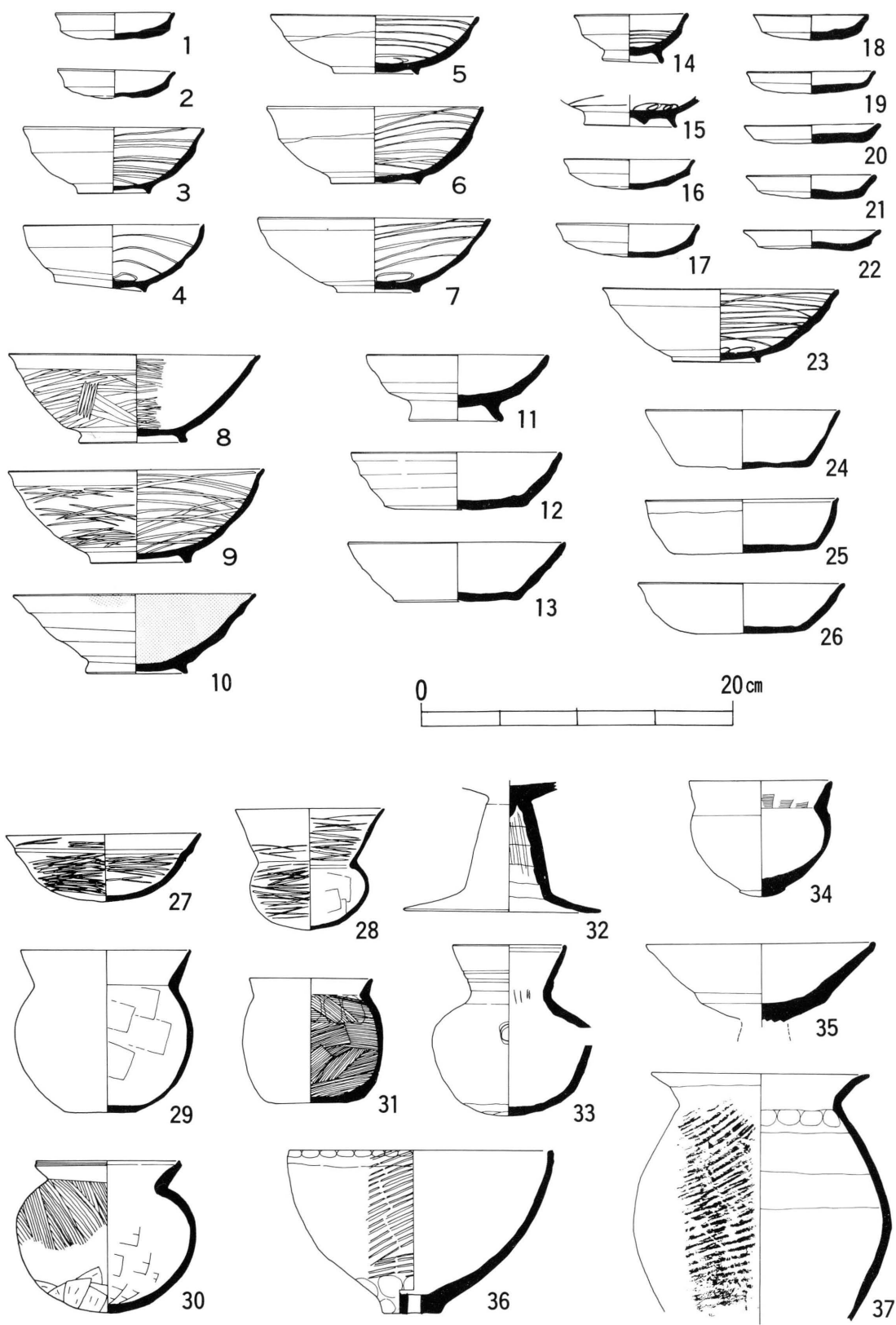
上部を溝7によって削平されるため検出面はやや明瞭さを欠くが、標高10.8m前後で検出した。規模は、2.5～5m以上、深さ0.5m以上である。東側肩部の崩壊が激しい。溝内堆積土は3層あり、青灰色砂、砂泥層、砂礫層である。中間に位置する青灰色砂からは多量の遺物が出土した。土器類は、布留式の甕、壺、高杯（第6図32）、また陶質土器の甕、甗（第6図33）、など木器類はてんびん棒、木槽など出土した。

溝 9

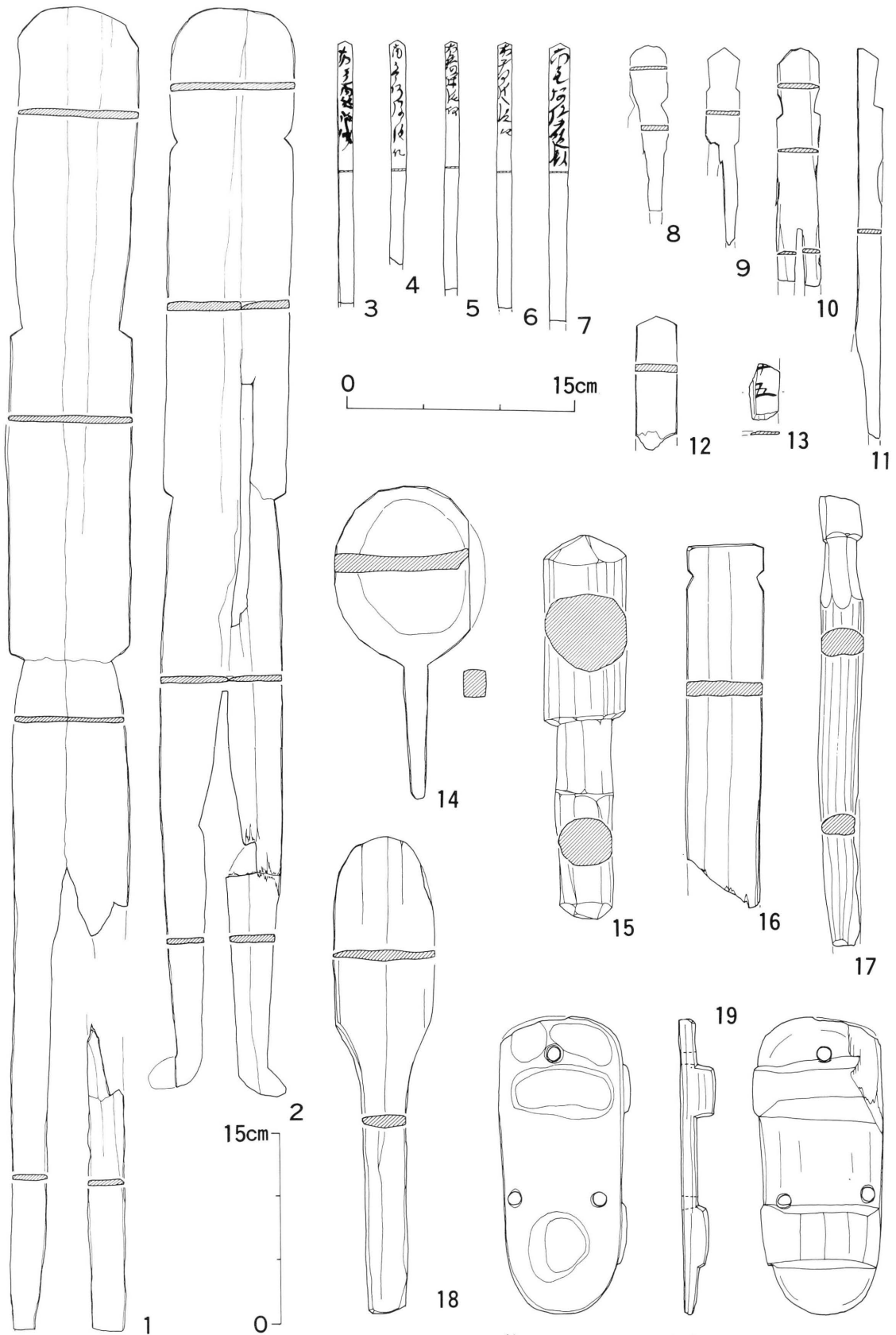
標高10.2mで検出された灰色粘土上面よりの切り込みで、幅4～6m、深さ0.4m以上を測る。一部の肩には木杭が打たれる。堆積土は2層のみで単純である。出土した遺物は、土器類は、庄内～布留式にかけての甕（第6図34）、壺、高杯（第6図35）など、木器類は、建築部材、木槽などがある。

溝 10

標高10m前後の無遺物層である灰色帯状粘土上面より切り込み、幅4～5m、深さ0.2mを測り、A地区でやや蛇行する溝である。中央部のB地区には木杭が数点打ち込まれる。堆積土は、茶灰色土の単純層である。出土した遺物は、弥生後期の甕（第6図37）、甗（第6図36）などと共に、梯子、有頭棒（第7図17）、編錘、木槌（第7図15）などがある。（渋谷）



第 6 图 4, 5 区 土器实测图



第 7 図 4 区木製品 実測図

5 区

5区は第5段丘の北縁辺部を占地する。

層序は、Ⅰ層・現代盛土、Ⅱ層・灰色土、Ⅲ層・地山である。Ⅱ層は調査区南端部にのみ部分的に検出される層である。検出遺構は全て第Ⅲ層上面よりの切り込みをもつもので、中世の溝二条、ピット群、土壇などがある。

溝 1

調査区の中央部を横切る形で西南方向から北東方向に直線的に掘削された幅0.6～0.8m、深さ0.6mで断面U字形を呈する素掘りの溝を調査区内約50mにわたって検出した。溝底レベルは、調査区南端と北端で約10cmの比高差をもつ。溝内堆積土は、二層に分かれる。下層は南部で厚く、北部に向って除去に薄く堆積する。上層はこの逆の状況を呈する。下層の黒褐色粘土層は、素掘りの溝にもかかわらず地山に含まれる礫の混入をみず、また上層との境界が明瞭であることから短期間の堆積層とおもわれる。上層の茶褐色土は二層に分層でき、土質の状況、礫の混入からみて下層に比らべ、比較的長期間かけて堆積したものとおもわれる。出土遺物は、上下層共に中世土器類が多量に出土した。調査区北端と南端部の上面では一括投廃された状況で土器が出土する。多量に出土した土器は瓦器椀(第6図23)が主で他に瓦器小皿(第6図14～17)、土師器皿、小皿(第6図18～22)、羽釜、陶磁器などがある。

溝 2

段丘の縁辺にそって掘削され、現代の溝3に切られる。幅1.9m以上、深さ0.4～0.5mの規模で素掘りである。溝内堆積土は二層に分層でき、中世の土器が少量出土した。

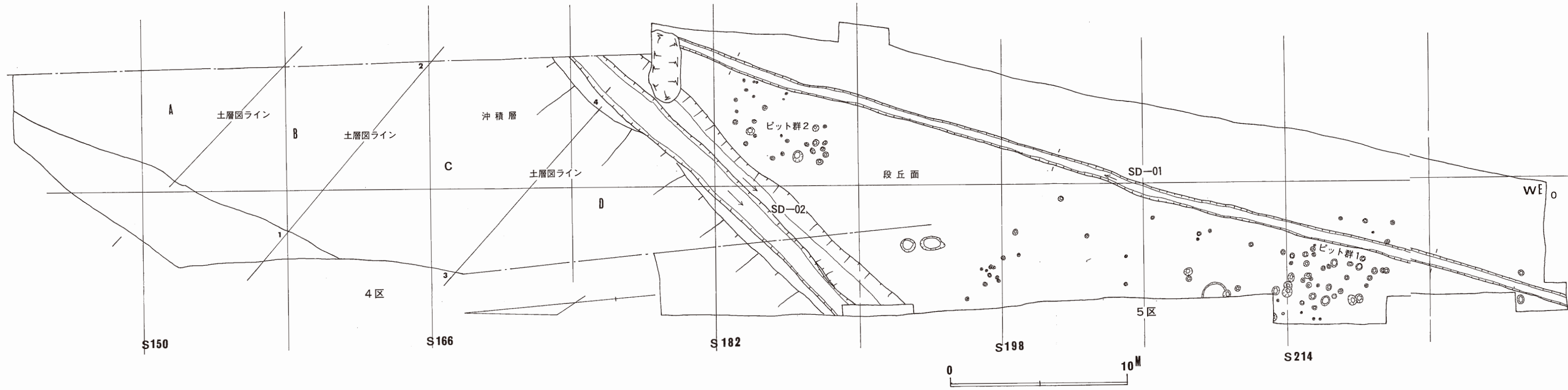
ピット群1

調査区南西部で集中して検出された。円形を呈し、径0.1～0.5m、深さ0.1～0.3m程度の小規模なもので切り合いをもつものもある。埋土は、茶褐色土と黒褐色土の二系統存在する。ピットとピットの関連については明確にしえなかったが、同一場所に多量に集中して存在することから、数時期にわたって掘立柱建物跡が営まれたものとおもわれる。ピット内埋土より少量の瓦器椀、土師器片が出土する。

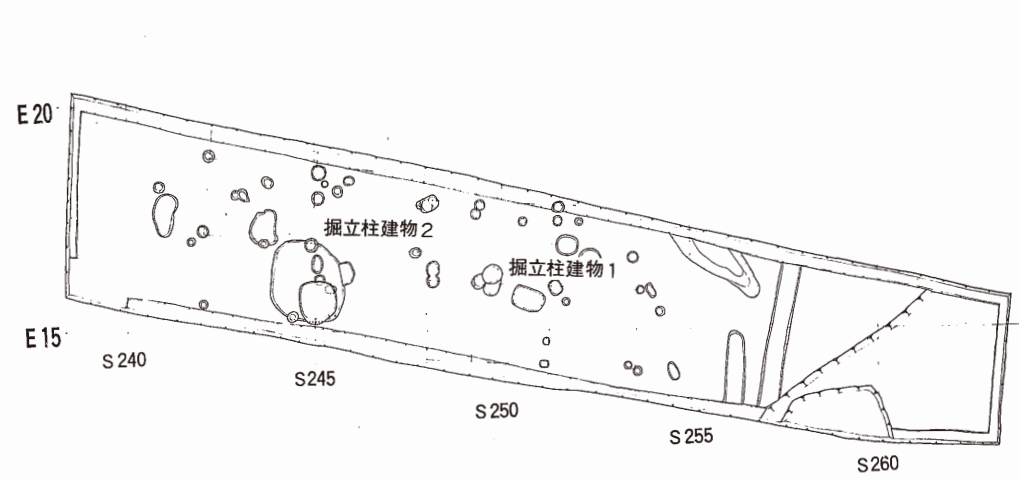
ピット群2

調査区北端で検出。円形や楕円形を呈し、径0.1～0.8m、深さ0.2m前後のピット群を検出した。埋土は、黒褐色土である。20数個検出したが、不明瞭なプランを呈するものもある。自然地形のくぼみの可能性もあり、明確に掘立柱建物跡と断定しえない。しかし、ピット群1とピット群2の横方向の溝1上面、上層において多量の中世遺物が一括出土した点、またピット群1とピット群2をつなぐ空間領域の溝1上面、上層には逆に遺物が少ない点からして、掘立柱建物の可能性も捨象しえない。

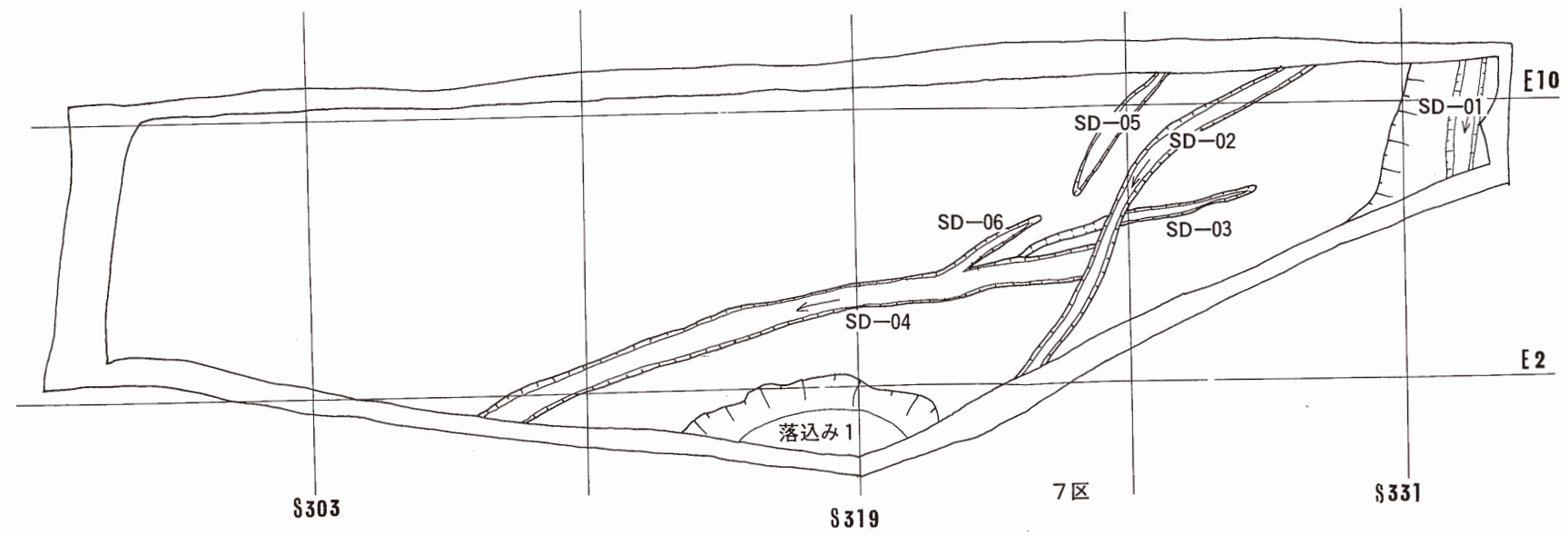
(渋谷)



第 11 図 野田地区遺跡 4、5区



第 12 図 野田地区遺跡 6 区



第 13 図 野田地区遺跡 7 区

6 区

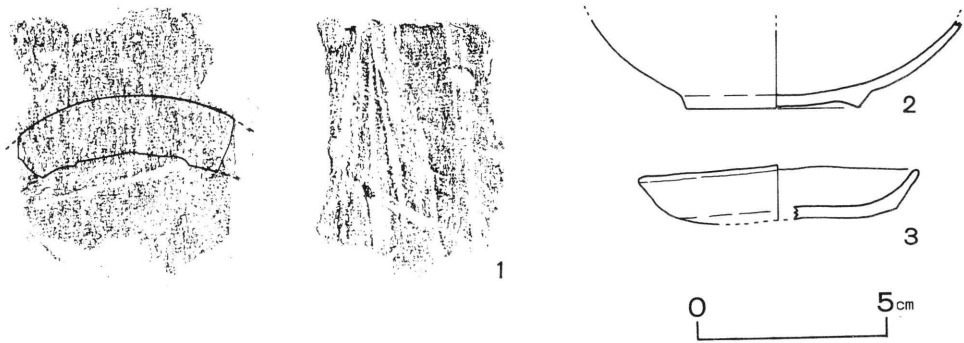
第6区は、第5区の東南にあたり、貞和二年（1346）銘をもつ観音寺宝篋印塔の東側に隣接する地区である。調査は約5m幅で130㎡について実施した。

遺構 検出した遺構はすべて中世以後のもので、それ以前の遺構は皆無である。掘立柱建物・柱穴・土坑・溝が検出されたが、調査区の限定から建物等について規模あるいは性格について明らかにするには至らなかった。この中で掘立柱建物について概略を記すことにする。

掘立柱建物1 検出した範囲内では2間×2間の身舎に半間の廂がつく。柱間は桁行・梁行ともに2.2mを測り、束柱をもつ建物である。

掘立柱建物2 掘立柱建物1同様検出した範囲内では1間×2間で柱間はそれぞれ2.1m、2.9mを測る。同じく束柱をもつ建物である。

遺物 奈良時代の須恵器・瓦片が若干出土している。他は瓦器碗・土師器小皿類である。（1）は凸面に縄目痕を残す丸瓦の破片で二次焼成を受けたものである。（2）（3）は掘立柱建物1の柱穴から出土したもので13世紀後半代と考えられる瓦器、土師器小皿である（第14図）。（富加見）



第14図 6区遺物実測図

7 区

7区は調査区内最南端の第5段丘に位置する。層序は、Ⅵ層に分層でき、Ⅰ層・現代層・Ⅱ層・耕作土、Ⅲ層・床土、Ⅳ層・灰色粘土、Ⅴ層・淡青灰色粘土、Ⅵ層・暗灰色粘土、Ⅶ層・砂礫層（地山）である。Ⅰ～Ⅲ層は現代層で遺物は含まない。Ⅳ、Ⅴ層は微量の中世遺物を含む。Ⅵ層は中世遺物包含層で、多量の瓦器碗、皿、土師器皿、羽釜、白磁碗及び微量の奈良時代の須恵器杯を含む。検出した遺構は、標高13.2～13.3mの第Ⅶ層上面より切り込むもので、溝五条、落込みなどがある。

溝 1

幅3.4m以上、深さ0.45mの規模をもち、検出しえた北方の肩部には径8cm前後の丸杭を打つ。溝内には4層の堆積土があり、全て中世遺物を含む。4区溝2出土の同タイプの瓦器碗や皿、土師器皿などが出土する。

溝 2

幅0.5m、深さ0.4~0.5mで断面V字形を呈し、なだらかに蛇行する溝である。堆積土は2層あり、上層には少量の中世遺物、下層は無遺物層である。

溝3、溝4、溝5、溝6

溝3は、幅0.2m、深さ5cmで、溝2、4に切られ、南部で消失。溝4は、幅0.6~0.8m、深さ5~10cm、黒色土が堆積。南部で消失。溝5は、0.5m以下、深さ2~3cmで非常に浅い。溝6は、幅0.2~0.3m、深さ5cm前後。溝6と同一の可能性あり。溝3~6は出土遺物はない。

落込み

調査区中央部西端で検出。池状の遺構。遺物なし。(渋谷)

4. 藤並地区遺跡

神楽山南方に位置する藤並地区遺跡は、発掘対象とした面積が5000㎡あり、瓦器や旧石器が表面採集されているだけで性格は不明であったため、全域を把握する目的で3×3mの試掘坑を13ヶ所設定し試掘調査をおこなった。基本的に耕土、床土、中世遺物包含層の3層を確認し、またグリット12において溝状遺構を確認したため、攪乱を受けて遺構の存在がないと判断した2区をのぞいた1、3、4区を全面発掘した。(渋谷)

3 区

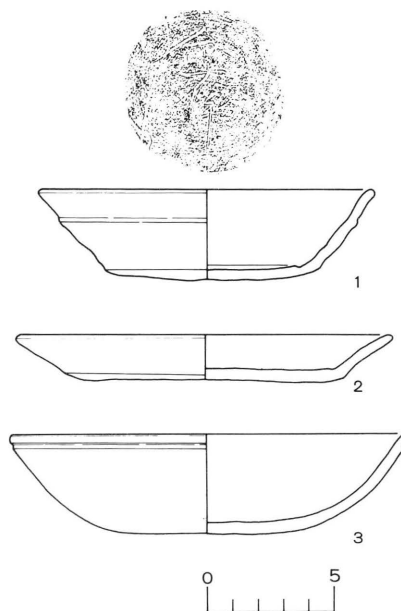
数多くの柱穴・土坑を検出したが、削平がきつく、遺構としてのまとまりは明確でない。出土遺物は須恵器のみである。(上田)

4 区-I

現代の土坑、溝を検出したのみで出土遺物はない。(渋谷)

4 区-II

5区は南側に標高42.7mを計る小丘阜の北麓部にあたるが、水田開発により、既に平坦化されている。標高18mを計る水田耕作土から遺構検出面である、標高約17.7mを計る黄褐色土面までは、水田床土、中世遺物を含む暗褐色土のほか、一部に灰色粘質土がみられる。瓦器片を含む暗褐色土には、サヌカイト製の有舌尖頭器や縄文時代草創期ないし早期の石鏃などを含むことや、土器片が細片ばかりであり、また水平土層であることなどから、中世以降の攪乱土層とみられる。黄褐色土の削平もあったものと考えられ、中世遺構は皆無の状態であった。ただ、黄褐色土を切り込んだ、平安時代遺物を含む溝状遺構を検出したのみである。



第15図 溝状遺構出土土器実測図

遺構 前述のとおり、南側小丘阜の山裾に添って掘鑿されたとみられる溝状遺構を約26mにわたって、また、南側丘陵部より流入する小溝をも併せ検出した。溝状遺構は、検出面で、幅5.2～6.3m、深さ1.3～1.4mを計り、北方向に除去に深くなる。黄褐色土系統の崩れ込みが顕著であつらしく、底ざらえをおこなっている。その時期は出土遺物から10C前半代とみられるが、溝状遺構の初現時期は不明である。下層は砂層と木葉・木片を多数含む粘質土が互層をなすが、上層では粘質土の堆積が顕著である。合流する小溝は幅約2m、深さ0.8mを計り、砂層の堆積が顕著である。

遺物 土師器、黒色土器、須恵器、木製品（荷札、曲物）が出土したが、土師器、黒色土器が多い。溝状遺構の底ざらえ時期に該当すると思われる一括遺物である（第15図）。

土師器杯は、指頭圧痕を残し未調整のままの底部外面以外は横ナデにより丁寧^(註1)に仕上げている。面は、いわゆるf手法が顕著なものが多く、口縁部下方に段をもつ。口唇部内側に沈線をもつものともたないものがみられる。底部中央に焼成後穿孔したものや、「今南」と読めるへら描文字を入れたものがある(1)。

土師器皿 前述の杯と同様の手法を用い、f手法を用いたものと、そうでないものがみられる。底内面にはハケ調整を施している(2)。

黒色土器椀 いわゆる黒色土器A類のもので、内側は、底部に丁寧な平行へら磨きを施した後、口縁部に至るまで丁寧な平行へら磨きを施す。外面は口唇部に沈線を施したあとへら削りを行ない粗いへら磨きを施す(3)。

以上の土器は雲母を含む微粒子土を用いた焼成良のものが多い。10C前半の土器であろう。

(藤井)

註1 「平城宮発掘調査報告Ⅳ」奈良国立文化財研究所 昭和37年 P.25

IV. 結 語

(野田地区遺跡)

1. 遺跡のあり方が地理的制約を受け地域としてのまとまりが強い紀伊にあって、弥生時代以降の歴史は、けわしい山脈をぬうようにして流れる紀ノ川、亀ノ川、有田川、日高川、会津川等の各河川下流域に発達した沖積平野部を主軸に展開される。有田地方は、畿内及び紀ノ川、亀ノ川流域に代表される紀北地域と日高川、会津川流域に代表される紀南地域の間地点に位置するため、地理的要衝として重要な地域で、各時代共に独自の文化を発展させるとともにまた他地域との交流も活発である。こうした特色をもつ有田地方での考古学資料の蓄積は、地ノ島遺跡、鷹島遺跡、一本松、宮原両古墳、日光神社遺跡など限定されたものであった。海南・湯浅道路建設工事に伴ない実施された今回の発掘調査は、限定された時間内での行政発掘という制約は受けつつも、わずかな考古学資料の蓄積しかもたなかった有田地方の古代・中世史解明への希求に多くの資料を提供した。

2. 遺跡の立地と深く関連する地形の問題として今回の調査では第5段丘面の検出、また沖積平野と段丘の境界部の検出が上げられる。

3. 野田地区遺跡は、青蓮寺に保存されていた古絵図や貞和二年(1342)の銘のある野田宝篋印塔の存在、或いは「古は観音寺として七堂伽藍の地なりしに頽廢して今は石地藏のみ残り」(紀伊続風土記卷之六十)等の伝承により寺院址としての観音寺の存在が推定されていた。今回の調査でも第五段丘上に位置する6、7区で包含層に含まれていた7C後半～8C初頭の須恵器や丸瓦片など、また5区SD-01出土の平安時代後期の丸瓦片などの資料を得た。6、7区は第四段丘面に最も近い地点に位置し、これら遺物の出土は、天満Ⅰ・Ⅱ遺跡、藤並遺跡 風呂谷瓦窯跡、羽釜古窯跡など第四段丘西域に集中する遺跡群への関連を強く示唆するものである。この問題はまた有田地方での郡衙推定地の問題とも関連する。

4. 検出遺構では、段丘と平野の境界部、沖積平野上に弥生時代後期以降中世まで連続と營為した十条の溝状遺構がある。野田地区遺跡4区検出の溝状遺構は、水稻耕作に不可欠な灌漑用水路と推定されるため、その提起する問題は多岐にわたる。周知のように、古代～中世社会は、農業生産それも水稻耕作を主軸とする社会である。水稻耕作に不可欠な水路は、その建設にあたって労働力の集中を必須の条件とし、また開発による生産力の向上は、時代の指標として共同体や国家と不即不離の関係を持つ。つまり、労働力の集中と土木技術を背景に農業生産力を増大するために設備された農業施設としての溝の実態解明の作業は、共同体或いは国家の構造を解明する有力な視点になるものとおもわれる。

異なった時代に属する十条の溝群は、共通項としては二点上げられる。第一は、小島や野田など段丘上よりみおろし、北前面にひろがる沖積平野部を対象に開発、耕地化のために建設された性格をもつということ。第二は、地形上、最も幹線としての溝を掘削しやすいという地理的有利さをも

った地点であること。しかし、弥生時代後期～室町時代に至るこの時代の推移の中にある個別の溝は当時の気候、建設をおこなった主体、労働力の編成、土木技術、用水管理など溝の背景となる時代の特質が大きく異なる。それはまた、溝10～8が3C後半～5C代、溝7～5が8C後半代～10C代、溝4～1が10C～14C代にあること、つまり、溝群の断絶と連続にも反映、投影されているものとする。溝10の時代、溝10から8までの連続性、それ以降溝7までの衰退、溝7から溝1までの連続性などである。

溝10の時代には北東方向約1.5kmの微高地に位置する有田川水系の拠点集落、尾中遺跡が存在する。尾中遺跡は吉備町教育委員会により継続して発掘調査され、弥生時代中期後半に微高地の東端と西端部に掘削された環濠に相当すると考えられる3.5m以上の規模を有する溝や、住居址、また弥生時代後期末～庄内期にかけての住居址など検出された。この事実は、現在の段階の考古学資料として、弥生時代中期後半には、大規模な溝を沖積平野部に掘削しえる共同体が存在することを示す。弥生時代後期後半には、小島や野田などの平野部にも開発を進めたものと推定しえる。

溝7から溝1までは連続性をもち、また溝4に示される大規模な溝の建設、また溝3、2に示される護岸技術など、前代の溝に比べて大規模な労働力の投入や進んだ土木技術などに時代の特質が反映、投影される。中世初期に在地領主として姿をみせた湯浅党との関連や野田大溝との関連など展開されるべき問題は多いが、各溝自体の所属時期また十条の溝の比較など、得られた資料の検討をまって展開したい。

5. 出土遺物は豊富である。段丘面より沖積平野部への落込み、各時期の溝内堆積土より出土した土器類、木器類は編年資料として重要である。また個別遺物として特記すべき物には、溝10出土の梯子、溝9出土の建築部材一式、溝8出土の2点の陶質土器、溝7、6出土の木簡、人形、溝6出土の机、溝2出土の笹塔婆など上げられる。

溝8出土の2点の陶質土器は、地の島遺跡で検出された弥生時代後期末から古墳時代の箱式石棺出土の人骨が中国人的傾向をもつことや四神文鏡や蒙古鉢形冑の出土で知られる椒浜古墳が大谷古墳の被葬者と同様、大陸・朝鮮とりわけ南朝鮮と関係が深いなど、水軍として著名な紀氏の拠地である有田地方の地域色をより一層鮮明なものにする資料である。

溝7、6、2で出土した人形や笹塔婆など木器類には呪術、仏教関係の資料が多い。人形は編年資料として重要である。

溝2出土の笹塔婆は、川、堀、溝、池などからの検出例では全国で7例目にあたり、量的には唯一のものである。また、溝内よりほぼ一ヶ所に八百点あまりがかたままって出土した事実は、水に流すことにも宗教的意味をこめた民俗信仰の一端と理解しえる。「百鍊抄」の養和元年十月十一日、こけら経、心経千巻を書いて供養し、俵十二に納め、東海西海に流すとの記事も同様の意味ととらえることができる。また笹塔婆と共伴した瓦器椀が、つくられたままの完形で他に日常雑器類がふくまれない事実は、宗教的意味をこめて笹塔婆とともに水に流したととらえることができ、日常雑

器としての瓦器碗がその使用の点において非日常的色彩をもつ宗教的な儀礼にも使用されたと考えられる。

6. 展開されるべき問題は多岐にわたるが、第一に得られた資料の詳細な検討——個別な溝の所属時期、出土遺物——、また過去の考古学資料——日光神社、地の島、鷹島など——との比較検討、沖積平野部での資料とともにため池を必要とした段丘面に対する開発——一端の資料として藤並地区遺跡5区検出の10C前半に位置づけられた溝状遺構の存在——の初現時期など、今後の資料の増加もあって、有田地方の古代・中世史の一端を明確にする作業は今後にかせられた課題といえる。

(渋谷)

註1 和歌山県教育委員会「地の島遺跡発掘調査概報」昭和46年

註2 巽三郎、中村貞史「鷹島遺跡発掘調査報告書」昭和44年

註3 有田市教育委員会「一本松古墳・宮原古墳」昭和55年

註4 羯磨正信「日光神社発掘調査報告書」昭和41年

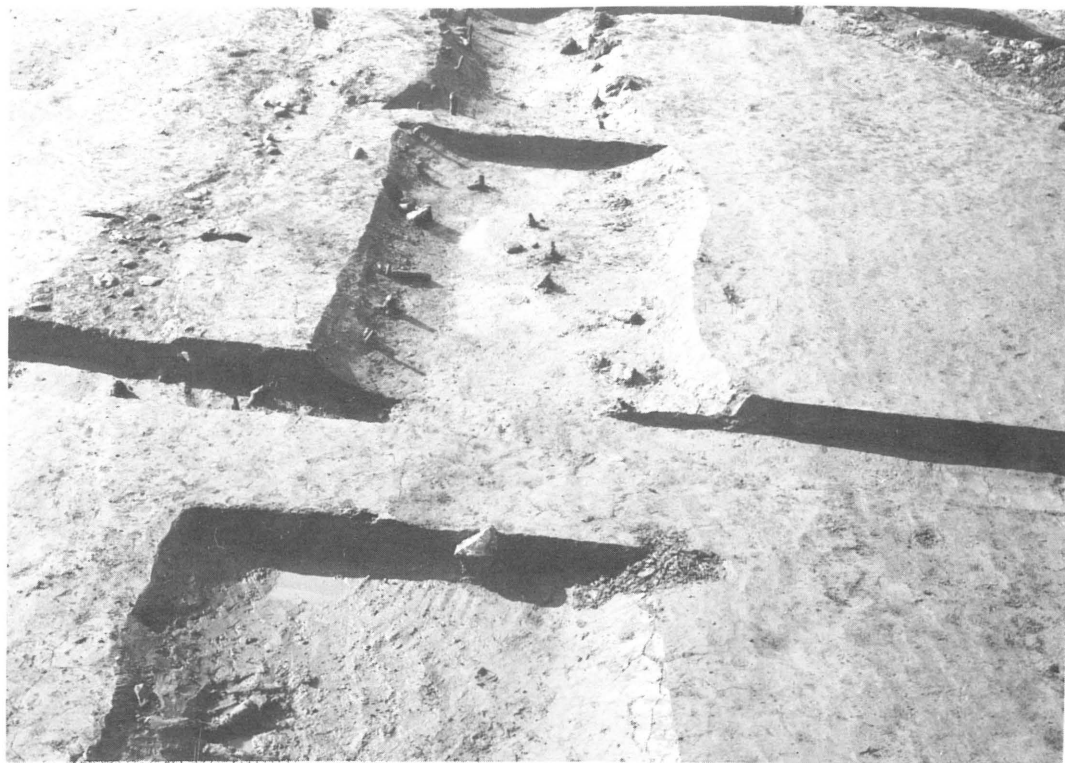
(藤並地区遺跡)

前章までに示したごとく、藤並地区は中世以降大規模な削平等をうけていたため、顕著な遺構としては10世紀前半代の遺物を含む溝状遺構を検出したにすぎない。溝状遺構は、その規模や地形から推して灌漑用水路の機能をはたしたものと考えられ、この地域における水田開発等、生産性の増加を計る必要性から開発されたものとみられ、文献史料との対比により当時の政治経済の一端をものがたる資料として貴重な遺構・遺物である。一方、削平・整地等により形成された遺物包含層には、瓦器片などに混じって検出した旧石器時代から縄文時代早期にかけての石器類は、周辺の土生池遺跡などで採集されていた石器類とも共通性が認められ、来年度以降の一層綿密な調査により、有田川流域における狩猟採集経済社会の実態を明らかにしていきたい。

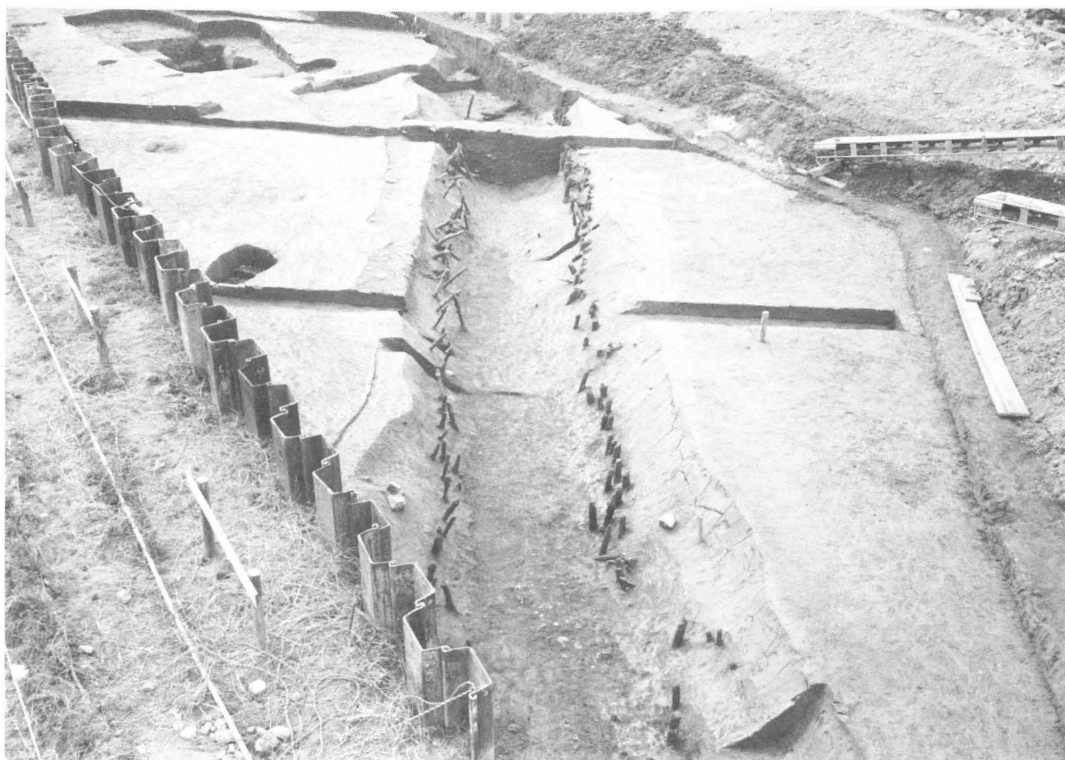
(藤井)

図版一 航空写真





4 区 溝SD-01 (北より)



4 区 溝SD-02 (北より)



4 区 溝SD-03 (南より)



4 区 溝SD-04 (北より)



4 区 溝SD-05、06 (南より)



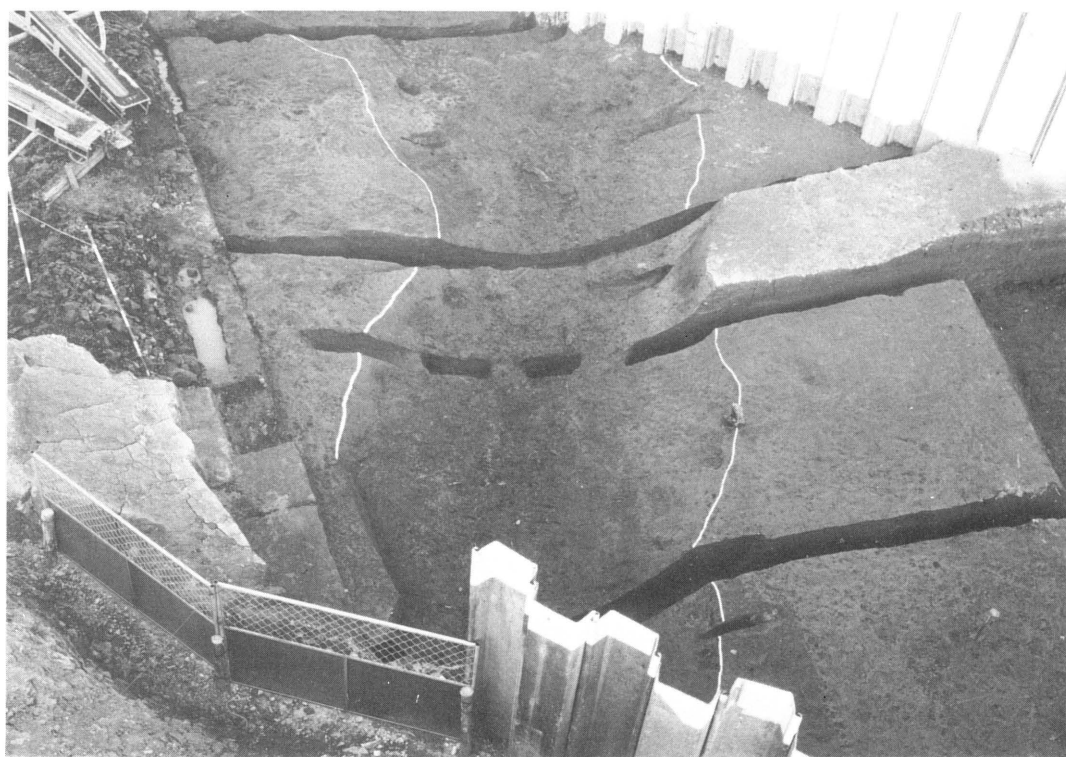
4 区 溝SD-05、06 (南より)



4 区 溝SD-07 (南より)



4 区 溝SD-08 (南より)



4 区 溝SD-09 (南より)



4 区 溝SD-10 (南より)



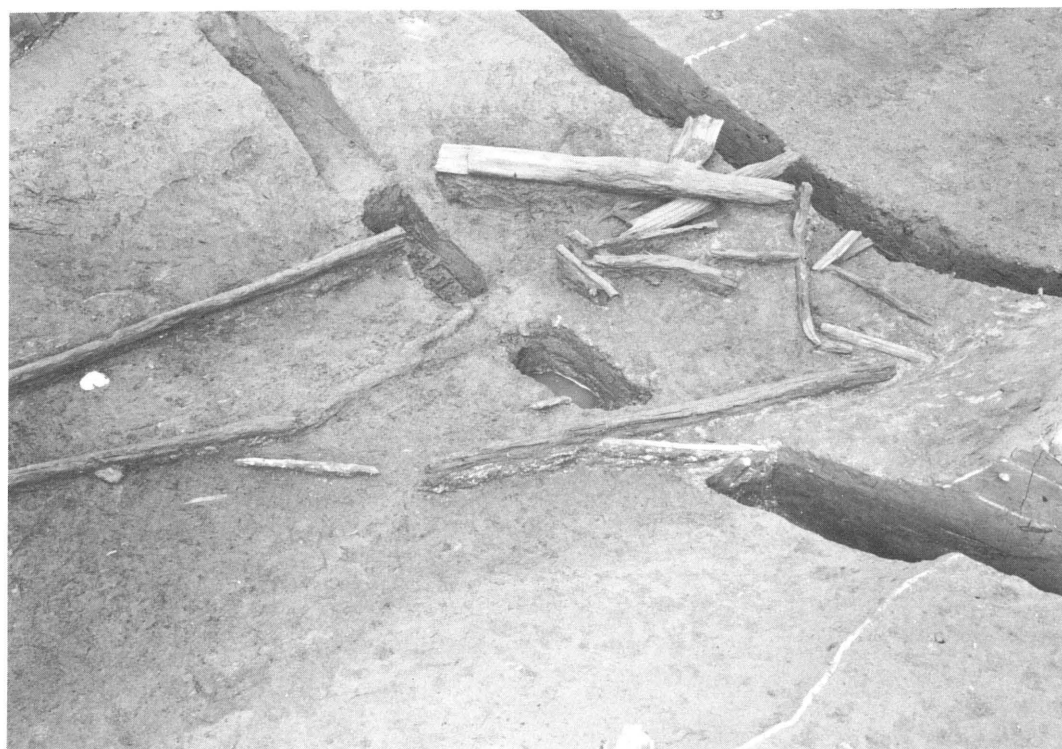
4 区 溝 S D-07 人形出土状況 (北より)



4 区 溝 S D-06 人形出土状況 (東より)



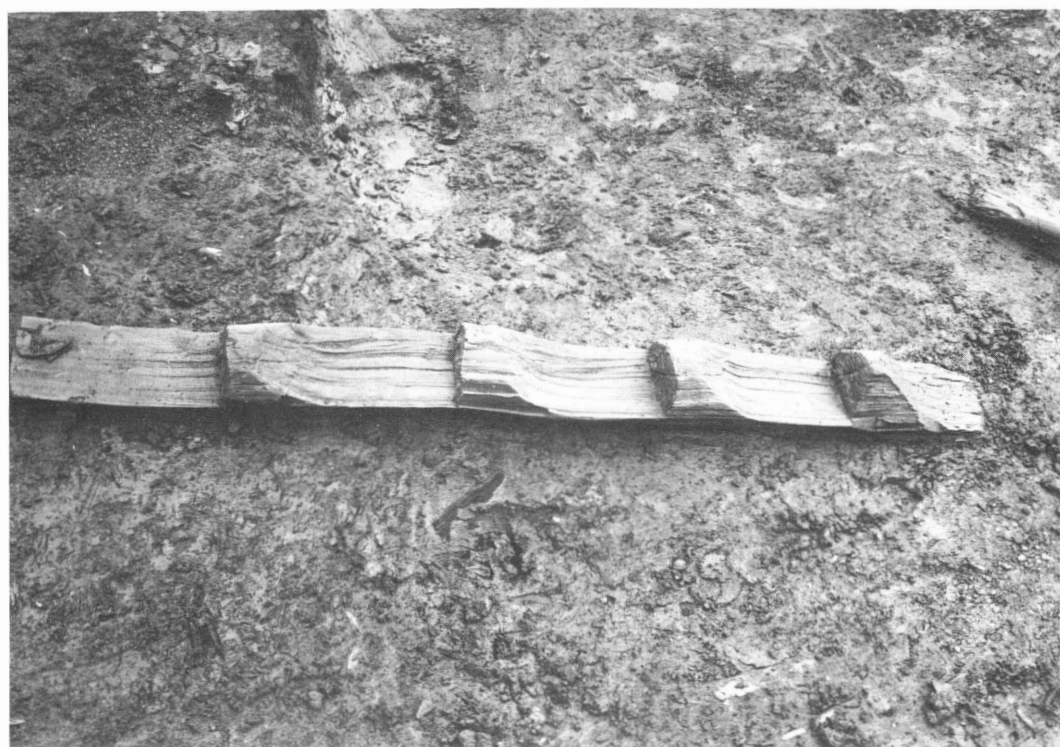
4 区 溝SD-08 木そう出土状況



4 区 溝SD-09 建築部材出土状況（東南より）



4 区 溝SD-09 木そう出土状況（南より）



4 区 溝SD-10 はしご出土状況（東より）



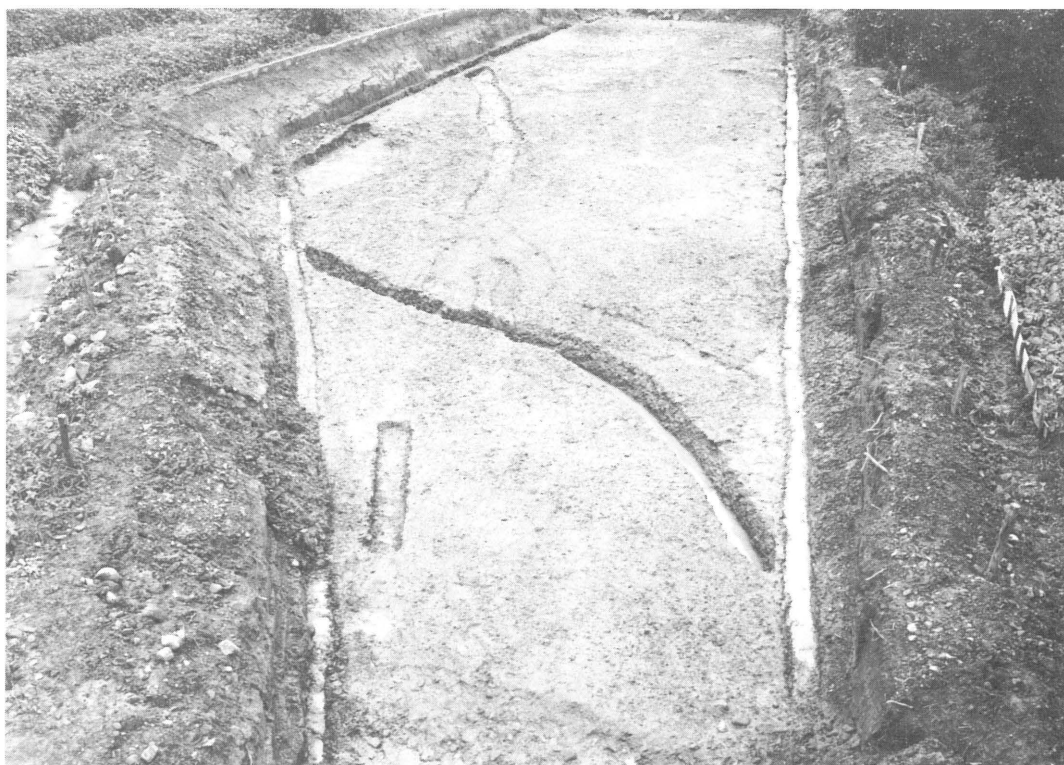
5区全景（南より）



5区溝SD-01（西南より）



6 区 調査区全景（北より）



7 区 調査区全景（南より）



3区全景（北より）



4区全景（西南より）



4区 平安時代溝（西より）



4区 断面 土層（西より）

昭和56年 3 月31日 発行

野田・藤並地区遺跡発掘調査概報

編集 和歌山県教育委員会
社団法人 和歌山県文化財研究会

発行人 井上 至

印刷所 邦上印刷